

# 障害があっても、高齢になっても、地域で安心して暮らすために必要なこと

支えあう 21 世紀の会

〒164-0012 東京都中野区本町 2 丁目 35-2

## 助成事業の概要

人口の高齢化が進むにつれ、障がい者の高齢化も進み、これまでは希少例であった「脳性マヒの二次障がい」を発生する症例が増え、またこれまでは希少な症例であった「頸椎手術」も身近な問題となり、そのことが、当事者また家族の不安に繋がるようになった。折しも福島で復興支援に携わっていた当会理事の新田通子（以後はMNと省略）が、この間70代で3回の頸椎手術を受けた。その結果、手術前以上にADLが改善され、自宅で一人暮らしをしている。そこで、復興支援後の最初の取組として「不安を抱える二次障害者の安心に繋がるように…」と願い、MN自身が及び、担当医の国際頸椎学会日本機構代表の三原久範先生・PT・OT等と共に、その3回の手術の「報告会」を開催した。しかしセミナー終了後参加者の感想は、手術以上に「手術後の在宅生活」に集中した。また特にMNは他の頸椎手術経験者の症状も知りたいと願い、探求した結果、福島県郡山市の白石長春氏（以下NS氏）と知り合うことが出来た。彼は障がい者の自立支援活動を牽引してきたリーダーであり、現在は郡山市で脳性マヒ者の自立のための「あいえるの会」を立ち上げ、障がい者の自立生活支援を実践している。私達はNS氏から学ぶため「頸椎手術とその後の暮らし」についてのセミナーを開催することとした。

当初2022年5月14日を予定したが、コロナ事情・仙台沖地震等により等により、2022年7月30日に、郡山社会福祉協議会で開催した。但し、福島県のコロナ感染が引かなかったため、寸

前になって急遽Zoom対応のみの開催となった。

頸椎手術の第一人者国際頸椎学会三原久範先生の基調講演「脳性マヒの二次障がいによる頸椎手術について」また三原先生から頸椎手術を受けた3人の当事者の手術とその後の在宅生活に関する報告により、不安を抱える人々を励まし「障がいがあっても高齢になっても、地域で安心して暮らし続けることができるために今、何が必要か…」をテーマとし、当事者同士の懇談を計画した。しかし急遽、Zoomのみの対応となったため懇談は難しく、十分な内容を得ることができずに終わった。手術後の暮らしについて補足セミナーを開催することとし、内容を深めるために月1回のZoomを重ねた。内容として、「在宅生活への不安」の多くが「障害者の支援サービスが65才になると、自動的に介護保険優先のサービスに替わってしまう制度通称「65才の壁」への不安にあることが、メンバーの共通理解となった。会議の中で、NS氏より「65才問題に関するきょうされんからのアンケートが行われ、近く結果が出る」との意見がだされた。そこで早速きょうされんを訪問、現状を伝え、「準備中のセミナーでアンケートの結果を報告頂きたい」旨を依頼した。幸いなことに事務局長の多田薫氏から快諾を得ることが出来た。

その結果話し合いが進み2023年3月21日「65才の壁問題を中心に「障がいがあっても高齢になっても安心して楽しく暮らせるために…二次障がいによっての暮らしと65才の壁」と題して、東京で7月30日セミナーを補足するセミナーを開催した。

## 事業の成果

コロナのために何度も変更を繰り返し、長期に亘る研修となったが、当メンバーがあきらめず十分に審議し、内容を深めてきた。セミナーで十分に話し合えなかった部分をZoomによる会議を重ねて「手術後の在宅生活不安」が「65才の壁」と言われる障がい者制度の改善こそが重であるところに行きついた。長い間「障がい者の寿命は40才」と言われていた時代に制度化されたままになっていた「障がい者支援制度」だが、現状サービスが足りない場合は個人的に市町村窓口で折衝することになっている。その辺りは知らない人が差別されたままになっている。どのような制度であるかこれまで公にされてこなかったが、このセミナーを通して、きょうされんの症例報告が得られたことは大きな成果であった。「65才の壁」を交渉によって越えられることが公になれば、障がい者支援制度が「安心して暮らせるための制度」に一步近づくことになる。脳性マヒ者については、未だ市町村窓口で人数の把握さえもできていない。当事者は発声に障がいがあり、訴えも困難な実状がある。MNのように会話が明瞭な当事者が、自身の問題だけでなく、社会の問題として声を上げることが重要である。また三原先生のように「ネットワークの重要性を発信される医師に出会えたこと、そして意を述べ合えたことも貴重な経験であった。医師の場合、福祉職と比べ、患者と一対一での対話が多く、多くの人に同時に話すことのできるのは「学会等に限られる」という控えめなご発言をされながらも、福祉関係者との対話に、また患者の小さな意見にも丁寧に応えて下さる姿勢は、きっといつか大きなネットワークに繋がることと感じた。そうした医療者の姿勢により、医療者も多くの情報をえられ、脳性マヒ者の定期的な検診に繋がれば、障がい者の全体をつかむことになり、それはすなわち脳性マヒ者・

また二次障害者の安心した暮らしに繋がることだろう。

## 成果の広報・公表

当セミナーの内容について「報告集」の発行を目指し取り組んでいる。報告集をセミナー参加者の他、多くの医療、P・関係者また福祉関係団体、に配布、またきょうされんを通して、全国に配布また、厚労省をはじめとする公的機関など予算を見ながらお届け、配布したい。

## 今後の展開

報告集の発行により、障がい者制度の65才の壁は、全国共通の手続きによって乗り越えられるようになることを願い、更には「65才の壁」を無くす事により、必要なサービスが受けられるようになれば、頸椎手術への不安も軽減されると考える。特に医療関係者に、手術後、地域で暮らすことになる当事者の訪問医療にも大いに関心を寄せていただき、「障がいがあっても、高齢になっても安心して楽しく暮らせる社会」に繋がるようにと期待に胸を膨らませている。【報告集】の発行はこれからなので、実際にどのようなことが可能となるか…楽しみにしている。